

# 『上牧・鵜殿ヨシ原 その後

## 木材チップはつる草を抑え込んだ!?

「雅楽だより」前号で、筆策の蘆舌に使用するヨシが激減してきていることから、早急になんとか対策を取らないと筆策用ヨシは、採れなくなってしまう。

なので地元の方々などが筆策用ヨシの復活に向けた対策として、三つの方法を実行に移すことになったことを書きました。

その対策の一つは「木材のチップを敷く」というもので、つる草などの雑草駆除として、木材のチップを5m四方に約20cmの厚みで敷き、雑草の種に太陽の光が当たるのを遮断して雑草の生育を妨げる試みです。ヨシの地下茎が地下2m余のところにあるので、厚さ20cmほどの木材のチップは、ヨシの生育には影響を与えずに、雑草だけ成長を抑えられヨシの生育環境を良くすることが出来るというもの。

3月に木材チップを敷いて、その後、どのようになっているかを知りたくて、5月9日上牧実行組合の木村和男さんにヨシ原を案内していただきました。

ヨシ原に入ると、そこはウグイスが鳴き、ヨシは1メートルほどに成長していました。

### 木材チップを敷いて

ヨシ原を進むと高速道路の杭を打ち込む



木材チップを敷いた箇所 雑草などは生えていない。2019年5月9日撮影

作業が続いていました。その横を通り、木材チップの敷いてある場所に向かいます。

前回案内していただいた3月4日は、遠くからでも木材チップの敷いてある場所が分かりましたが、すでに背の高さあたりまでヨシやオギ、つる草に雑草が生い茂り、どこに木材チップが敷かれたのか、さっぱりわかりません。

案内していただく木村さんの後ろについてヨシをかきわけて中に入っていくと、「ここが木材チップを敷いたところですよ」と教えていただきました。



高速道路建設工事 川沿いの橋脚の場所 基礎工事の杭を打ち込んでいる。2019年5月9日

木材チップを敷いた一角だけは、なんとつる草や雑草は生えていないのです。オギも生えていますが、ヨシは生きいきと元気よく育っている。そして太いようにも思えます。つる草や雑草が生えていませんから、地面が見えるのです。

木村さんに「木材チップを敷いたところには、雑草やつる草は生えてきていませんね。この実験は成功ですね」と話しますと、木村さんは「まだ、秋になってどうなっているかを見てみないと何とも言えない。だが5月に雑草やつる草が生えてきてい



今年3月に木材チップを敷く 2019年3月撮影



木材チップを敷いた箇所 雑草などは生えていない。2019年5月9日撮影

ないので、うまくいく希望が持てますね。この木材チップの方法が上手くいけば、来年は木材チップを敷く範囲を広げていきたいですね」と話されました。

### つる草がヨシに

からまり付く

木材チップを敷いていない所は、つる草がヨシにからまり付いています。夏になるとヨシ



木材チップを敷いた所と、敷かない所の境目 敷かない所は雑草などが生えている。



5月なのにすでに雑草やつる草がヨシにからまりついている。



ヨシにからまり付くつる草

今年もまたつる草が・・・  
ヨシ原を歩いていると、やはり雑草が生い茂り、ヨシを見つけてもつる草がしつかりと巻き付いているところも多い。

シを押し倒してしまうのでしょうか。ヨシにからまりついたつる草を抜こうと思ひ引張りましたが、とてももからまり付いたつる草を抜くことは至難のことと思ひました。つる草の多い一帯は、秋になる頃は、つる草に押し倒され、昨年見たような状況になるのだらうなど、無念の気持ちがかかります。

### 地元の方へ感謝

#### 筆管用ヨシの復活へ向けて

今回、ヨシ原を見学して、木材チップを敷いた一角は、私の想像以上にヨシは元気に育っていた。このまま雑草が生えてこない事を願うばかりです。

そして同時に、地元の方をはじめ関係者の方々の地道な努力と苦勞に本当に頭が下がりに感謝の念がわいてきます。

筆管の蘆舌として、この上牧・鶴殿ヨシ原のヨシをいつ頃より使うようになったか分からないようだが、江戸時代元禄3(1669)年に書かれた『楽家録』には、「筆管の蘆舌は古くから撰津の国鶴殿の地に生えるところの蘆を用いる」と、小さい字で「故実なり」ともあるので、江戸時代より以前からのヨシ原のヨシを使っていたと推測されます。

また江戸時代 寛政10(1799)年刊行の『撰津名所図会』には、「鶴殿村の堤に生い出づる蘆なり。筆管の義鬚に可なりとて、むかしより世に名高く、貢に献るなり」と書かれており、ヨシが貢物として献上されていたことが分かります。

さらに明治時代になり「鶴殿の芦の刈り取りを願ひ出た」と宮内省の記録(1871(明治4)年2月)に記されています。

大正時代に刊行の『大阪府全志』の「大字鶴殿」の項には「特に本地の蘆は筆管の簧に最も適するを以て之を貢献し、古来独り其の名を擅にせり」とあります。

地元の方々をはじめ多くの関係者の方々

の努力によって、江戸時代よりはるか昔から雅楽の音色が現代まで伝えられている事をしみじみと感じ、感謝の念を抱きながらヨシ原を後にしました。  
(鈴木治夫)